

表紙の説明

晩秋の泉岳寺山門

佐藤 正 陸自78

元禄時代といえば、政治は武断から文治へと転換し、農業生産が増大して商業活動も活発化し、町人文化の花が開きました。

泰平の世が続く元禄15年（1702）12月14日の寅の上刻（午前3時）、本所の吉良邸を四十七人の義士が急襲します。世に言う「討ち入り」です。

本懐を遂げた四十七士は、本所から高輪への2里半の道のりを、雪を踏みしめながら黙々と進みます。おのおのがたは、何を思つて歩いたのか。

播州浅野家の菩提寺である泉岳寺の山門をくぐり、亡き藩主の墓前に吉良上野介の首を供え、一同、焼香をしたと伝えられています。

『忠臣蔵』は、時代を超えて日本人に愛されています。天下泰平の世にあつても、もし理不尽なことがあれば、それに立ち向かうことを尊ぶ気持ち、日本人の根底にあるからだと思います。

毎年、春と冬に泉岳寺で義士祭が執り行われますが、残念ながら今年はコロナ感染防止のため、自粛して小規模な形で行うようです。

写真は、晩秋の泉岳寺山門です。四十七士がこの山門をくぐり抜けてから、今月14日で318年が経ちます。